

大阪ろうさい クロニクル

第7号

発行日
2024.1.1

年頭のご挨拶

大阪ろうさい病院 院長 らく き ひろ み
楽 木 宏 実



新年明けましておめでとうございます。

2024年の干支は甲辰で、甲が「成長」を、辰が「整う」ことを表すともされます。活力旺盛に成長し、形が整うということであれば、12月にグランドオープンを抑えた本院の今年のありようのようです。昨年は、がん診療や救急診療の強化、ハートチームにブレインチームを加えた循環器センターの設置、手術支援ロボットの新型ダヴィンチXiを導入した手術体制の強化、高度急性期医療体制を支えるために看護師の増員などを行いました。新棟に移転して2年、さらに地域のニーズに応えるべく病院が一丸となって活動して参ります。旧病院の取り壊しも最終段階に入り、今年はその地を整備して駐車場を拡充し利便性を高めるとともに、バス路線も病院敷地内まで入ってアクセスが格段に向上する予定です。新病院のグランドオープンは、本院の理念である「誠実で質の高い医療を行い、すべての方々から選ばれる病院に」を強力に後押ししてくれるものと確信しています。甲辰の干支の通り、この1年でさらにパワーアップして地域医療の中核としての形を整えるべく邁進いたします。

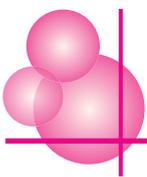
さて、本院は「勤労者医療を担ってこれを推進します」と基本方針に謳っています。勤労者医療は、予防からリハビリテーションまで幅広く健康問題に対処し、さらには職業生活を守るために職場と連携した職場復帰、疾病と職業生活の両立を促進することを含んでいます。最近では高齢になられても何らかの形で労働に携わられる人が増えており、労働の形態も様々です。医療の高度化と社会の高齢化によって勤労者医療の概念や支援体制も変革しています。時代のニーズに応じて職業生活を守るために、地域の先生方ならびに医療・介護・福祉機関や行政のご支援を引き続きよろしくお願い申し上げます。

基本理念

誠実で質の高い医療を行い、
すべての方々から選ばれる病院に

基本方針

1. 地域と連携し地域に信頼される急性期医療を行います
2. 高度で安全な医療に全力をあげてとりくみます
3. 患者さまの立場と権利を尊重する医療に努めます
4. 勤労者医療を担ってこれを推進します
5. 働きがいのある職場づくりを推進します



診療科紹介 消化器内科

副院長・消化器内科部長 平松直樹



消化器内科では、主に消化管(食道、胃、小腸、大腸)領域、肝臓領域、膵・胆道領域の疾患患者さまに対して、専門医が中心となってチーム医療を行っています(図1)。とくに、胃がん、大腸がん、肝がん、膵がんは、わが国の5大がんであり、外科、放射線診断科、病理診断科との良好な連携のもと、国指定のがん診療連携拠点病院として最先端のがん診療を行っています。



図1 消化器内科スタッフ

消化管領域の診療では、最新のハイビジョン内視鏡やAIを搭載した内視鏡システムの導入により、病変の早期発見と内視鏡診断の正確性がさらに向上しました。また、低侵襲な内視鏡治療である内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)は、食道がん、胃がん、大腸がんに対して年間約200例の患者さまに対して行っています。さらに、年間500例を超える炎症性腸疾患(クローン病、潰瘍性大腸炎)の患者さまの治療を行っており、難治の症例に対しては最新の生物学的製剤を使用して病勢のコントロールを行っています。

肝臓領域の診療では、慢性肝炎(B型肝炎、C型肝炎、非アルコール性脂肪肝など)や肝硬変患者さまに対して、最新の診療を行い、肝がんの早期発見に努めています。肝がんの内科的治療は、従来のラジオ波焼灼術(RFA)(図2)や肝動脈塞栓術の局所治療に加え、近年、進行した肝がんに対しても、患者さま自身の免疫細胞を活性化させる非常に有効性の高い薬剤が使用できるようになりました。当院では豊富な診療経験をいかし、これらの治療法を組み合わせた肝がん治療を行っています。大阪府における病院別の肝がん治療件数ならびにRFA件数の集計(読売新聞、2022年)では、当院は、近畿大学や大阪国際がんセンターなどに次いでいずれも第4位と上位でした。

膵・胆道領域の診療においても、レベルの高い診断・治療を行っています。この領域の中心的手技である内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)を用いた検査・処置の年間件数は700件以上であり、大阪府のなかでもトップクラスです。経皮経肝胆管(胆のう)ドレナージなどの処置にも熟練しており、急性胆管炎、急性胆のう炎そして急性膵炎などの救急症例に対する緊急処置を24時間、365日対応しています。また、超音波内視鏡(EUS)を用いた検査も年間500件以上と非常に多くの症例に施行しています。近年漸増している膵がんに対しては、積極的にEUSならびにEUS下での穿刺吸引法(EUS-FNA)を施行し、早期に診断することで、手術や抗がん剤治療の早期実施を可能にしています。



図2 手術室におけるRFA術施行

診療科紹介 麻 醉 科

「安全と効率化を目指して」

麻酔科部長 松 浦 康 司



令和4年1月、大阪ろうさい病院は年々増加していく医療需要に応えるために手術室16部屋を備えた新病院になりました。手術室関連の特徴はその広さです。なぜ広さが大切かというと最新の医療設備(内視鏡システム da Vinci(ロボット支援))はどれも繊細で巨大な機械になります。それを手術のたびに機材庫から移動していく作業よりは部屋を固定して置いたままといった方法が広い手術室では可能になりました。これは移動に伴う機器故障の危険性や煩雑さの排除(スタッフのストレス減)に貢献いたします。次に、手術はもちろんのこと、全身麻酔も広い部屋のほうがやりやすいのです。最新の麻酔器は、患者さまの生体モニターも進歩し、見やすい大画面になり、使いやすくなってまいりました。電子カルテも麻酔器のそばにあります。麻酔の安全、効率化のためにはエコーも欠かせませんが、広い部屋だと扱いやすくなってまいります。また、患者情報は監視室でのセントラル管理も可能にし、各部屋の状況もいち早く把握できるようになりました。麻酔科医は1人で麻酔担当することも多いですが、共同作業で麻酔に当たることも少なくありません。そういったときにも広い場所があれば、ストレスを感じることなく安全性向上のための作業に集中できるようになります。

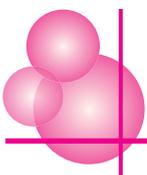
手術麻酔における安全性寄与のためには、術前から患者さまの状態、麻酔に対する不安を傾聴するために術前麻酔科診察を外来にて行っており、麻酔科医員すべてが情報共有できるようなシステムになっております。昨年度は、麻酔科管理数4,950症例と大阪府でもトップクラスの症例数を無事にこなせたのもこういった要因が大きいのです。もちろん、患者さまに信頼されている病院の証でもあります。今後とも麻酔科は、スクランブルにも対応できる優れた麻酔科医養成を始め、患者安全に努めてまいります。(スタッフ9名、非常勤2名)



図1 ハイブリッド手術室



図2 手術室ナースステーション



診療科紹介 感染症科・感染制御室

「新型コロナウイルスパンデミックの これまでとこれから」

感染症科・感染制御室 部長 川村尚久



2019年11月中国湖北省武漢の謎の肺炎として報告された新型コロナウイルス。

感染の波は瞬く間に世界に広がり、ヨーロッパや米国の主要都市では医療崩壊を招き、一部の都市ではロックダウンから都市機能は麻痺し、市民生活や経済に大ダメージを与えました。日本では2020年4月と8月の2回、今から思えば小規模な最初の感染の波を迎えました。アルコール消毒液・感染防御装備などが入手困難になるなど、新しい感染症への準備不足は明らかで、医療機関や行政がパンデミックの新しい膨大な業務に対応できませんでした。大阪ろうさい病院は、感染症科・呼吸器内科・総合診療内科を標榜科に持たず、感染症専門医は1996年にO157アウトブレイクを経験した小児科川村1名と感染管理特定認定看護師2名の体制でした。政令指定都市の基幹病院として行政からの要請を受け、2020年4月に病院正面玄関東側へコンテナ等を設置し、(PCR検体採取)外来専用診察室を設置、個室運用で感染患者の受け入れを始めました。市中感染者の増加と2021年1月に院内で起こったアウトブレイクを契機に検討を重ねた結果、東5階病棟(新病院では西10階病棟)がコロナ感染患者専用隔離病床設置に至りました。各科医師・看護部・臨床検査科を中心とした全病院体制で、900余名の肺炎患者を受け入れてきました。コロナウイルス感染症は流行初期と現在とでは疾患の重症度も大きく異なってきており、抗ウイルス薬もワクチンもなかった当初は5%を超えていた致死率も大幅に低下し、現在では0.22%となっています。これはワクチン接種が広がり診療ガイドラインができたこと、そして重症度の低い変異株であるオミクロン株が広がったことが影響しています。

2023年5月8日新型コロナウイルス感染症は2類感染症から季節性インフルエンザと同じ扱いの5類感染症になりましたが、重症化リスクの高い高齢者や基礎疾患のある患者が診療対象である大阪ろうさい病院では、重症度が推移していく中でも入院患者を守るための感染対策に変わりありません。仮に今回のパンデミックを乗り切ったとしても、過去にもSARS、MERS、新型インフルエンザなど、新たな感染症が次々と発生しており、2025年大阪万博で多数の海外からのインバウンドを受け入れるためにも、今後も同様の事案が起こることはほぼ間違いなく、未知の感染症に対して、どうすれば被害を最小限に食い止められるかが、我々に課された課題です。PCR検査法が感染症検査として一般化し、院内に新しい感染症検査として11月からFilm Array(全自動遺伝子解析装置)PCRシステムの院内運用を開始しました。複数の病原微生物を短時間で網羅的に同時検出するとともに、真菌感染症など臨床上重要な情報となる菌種名を早期に特定・報告することが可能となります。一般検査と異なり短時間で原因微生物が確実に同定されるもので、①追加検査の抑制、②耐性菌遺伝子の有無による抗菌薬の適正使用、③適切な早期診断により入院/治療期間の短縮などが得られます。また、抗菌薬が効かない(薬剤耐性: Antimicrobial Resistance、AMR)微生物を作らない・広げないことは、病院内外問わず重要視されており、感染症科は、多職種から構成される以下の二つのチームと院内感染対策を進めていきます。抗菌薬適正使用支援チーム(Antimicrobial Stewardship Team: AST)は、AMR対策として患者さまへの抗菌薬の使用を適切に管理・支援するための実働部隊です。感染制御チーム(Infection Control Team: ICT)は、AMR微生物の院内感染を防止するため、AMR対策として院内全体の感染動向の早期把握や感染対策を適切に管理するための実働部隊です。これからの院内感染対策活動へのご支援ご協力をお願いします。



診療科紹介 リハビリテーション科

リハビリテーション科部長 なつ夏 うめ梅 たか隆 し至



当院のリハビリテーションは主として、当院で急性期の治療を受けられた方の、移動・身の回りの動作・コミュニケーションなどの障害に対して、失われた機能の回復を促すとともに、残存能力を最大限に高め、患者さまが家庭や社会に復帰できるよう治療を行っています。

リハビリテーションの診療体制は2名の専門医、1名の看護師、22名の理学療法士、11名の作業療法士、5名の言語聴覚士、2名の事務員の配属となっています。

新病院でのリハビリテーション室は2階にあり、入口には生体モニタリングを実践する心臓リハビリテーション(80㎡)と診療部門、長いL字歩行路(60m)を配置したPT部門、3つの個室空間のST部門、最奥部にはお風呂・調理のシミュレーションができるOT部門がワンフロアをオープン空間に配置されています。さらに、より急性期のリハビリテーションに対応するため9階・8階病棟にサテライトリハビリ室(23㎡)を設置しています。

治療は、理学療法・作業療法・言語聴覚療法の各療法士が①脳・関節チーム、②スポーツ・がんチーム、③呼吸循環・脊椎チームの3チームに分かれて行っています。

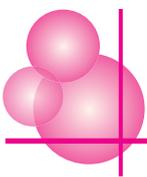
リハビリテーションのニーズは年々増加しており、2022年度は4,603人の患者さまがリハビリテーションを受けられ、疾患別リハビリテーションの総治療件数は年間68,621件(1日当たり252件)となっています。「安静は危機(毒)、運動は良薬」の概念のもと、積極的に離床を進めていることから、直接自宅に退院される患者さまの割合は、80%以上となっており、急性期病院としては非常に高いものとなっています。急性期治療後の回復だけでなく、自宅復帰、治療と仕事を考えた両立支援まで念頭においてサポートいたしますので、入院中のリハビリはご安心ください。



図1 リハビリ室風景



図2 リハビリスタッフ



健康診断部副部長 辻 真由美

近年、ライフスタイルの変化、高齢化社会の到来と共に、癌や生活習慣病の増加が社会問題となっています。更に2019年末からのコロナ禍も加わり、健康を取巻く情勢は大きく変わって来ていますが、健康がとても重要である事は、いうまでもありません。

癌や生活習慣病は、その初期には自覚症状がない事が多く、人間ドックで初めて指摘される方が少なくありません。そして、発見・治療が遅れば、大きな手術や長期の通院・入院が必要になり、日常生活や仕事への復帰が遠く可能性があります。

コロナ禍で運動量が減ったのに、体重は以前と変わらない。実は、「隠れ肥満」になっているかもしれません。筋肉量が減少し、脂肪、特に内臓脂肪が増加した状態です。

加齢や疾患によって筋肉量が減少すると、「サルコペニア」や「フレイル」のリスクにもなります。

当ドックでは、通常の間ドックの検査に加えてInBody(体成分分析装置)と内臓脂肪計、握力測定を用いて、潜む「隠れ肥満」、「サルコペニア」を暴きます。

InBodyは微量の電流を用いて筋肉や脂肪の分布を測定する機器です(図1)。InBodyについては、人間ドックの基本メニューに加えてオプションで追加して頂けます(2023.11現在、インターネット予約をされた方は無料で実施しております)。また、内臓脂肪については、以前は腹部CTが必要でしたが、近年開発された簡便な内臓脂肪測定機器では、インピーダンス法を使って被爆なしで計測ができるようになりました。当ドックを受診される方には、無料で測定させて頂いております(図2)。

当院は2022年に新病院へ移転し、目映いばかりの白い壁に囲まれた人間ドック専用の待合室になっています。

筋肉量や内臓脂肪は、体重だけでは改善の程度が目に見えにくく、是非、毎年人間ドックでの健康管理に加えて、ご自身の筋肉量や内臓脂肪レベルの変化を確認してみませんか？



図1 InBody(インボディ)

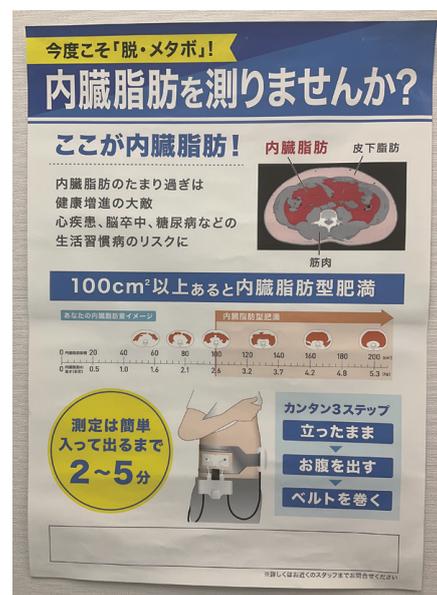


図2 内臓脂肪測定器によるメニューのお知らせ

部門紹介 看護部

看護部長 よしなが かよこ
吉 永 加代子



謹んで新年のお慶びを申し上げます。旧年中はご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

令和4年1月に新病院へ移転し、令和6年12月のグランドオープンに向け、旧病院の解体や整備が進んでおります。看護管理室の窓から見える景色が刻々と変わり、新しい風を感じながら日々、頑張っております。令和5年度看護部の活動をご紹介します。

【高度急性期病床の増床】 令和5年度は、高度急性期病床増床の実現のため看護体制の強化に取り組み、キャリアのある看護職を年度途中で複数名採用しました。“経験値(知)”のある看護職の教育について看護副部長を中心に看護部で検討し、円滑に職場適応ができ、体制の強化に繋がりました。

【地域連携の実践】 地域の中核病院としての役割と機能を強化するため、「専門・認定看護師の同行訪問」に取り組んでいます。患者さまが住み慣れた場所でその人らしく療養できるケアの「初めの一步」ですが、地域とのシームレスなケアを提供していきたいと思っております。

【タスクシフト・シェアへの取り組み】 看護師・看護補助者とのタスクシェアに取り組んでいます。今年度「看護補助者会」を定例で開催し、看護補助者の困りごとや働き方などの意見交換を行っています。その中で患者搬送の危険な場所の指摘があり、改善に繋がりました。今後も医療安全を高める看護補助者のきめ細やかなサポートが充実するよう支援していきます。

昨年までの数年間、コロナ対応に奮闘しながら、新病院移転という大きな課題に対応した職員のPowerと“大阪ろうさい病院Love”の情熱を看護部長として日々、実感しています。

令和6年は「診療・介護報酬トリプル改定」「医師の働き方改革関連法施行」があり、看護職も様々な変化や多様化に対応できるよう取り組んで参ります。

今まで以上に、地域の皆さまの期待に応えられるよう看護部もPowerUpして参ります。皆さま方には、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。





部門紹介 診療情報室

診療情報管理士 ^{すみ}隅 ^の埜 ^{すみこ}寿美子



「診療情報」とは、患者さまの診療の過程で、身体状況、病状、治療等について、医療従事者が知り得た情報をいいます。「診療情報」を適切に記録し安全に管理すること、さらに蓄積された診療データを利活用することは、安全・安心で質の高い医療を提供するうえで、極めて重要な意義と役割を有します。私たちは、診療情報管理を通じてより良い医療を支えるため、日々業務に励んでいます。

<主な業務内容>

- 診療情報係(診療情報管理士6名、事務員1名)、診療情報の管理全般、国際疾病分類(ICD)に基づく疾病分類、院内がん登録、診療文書の様式管理、医療年報・統計作成、診療データの抽出支援
- カルテ係(委託スタッフ5名)、紙カルテの管理、入院カルテの量的点検・督促
- スキャンセンター(委託スタッフ4名)、診療文書のスキャン管理

当院は、平成26年9月に電子カルテを導入し、すべての診療記録(=カルテ)を電子的に扱う「ペーパーレス電子カルテ」運用を行っています。これまで診療情報管理といえば、「モノ」の管理が中心でしたが、電子カルテの導入により管理の機軸が「情報」に移り変わり、それに伴い業務内容も変化しています。診療情報室では、診療情報の活用を推進するため、病院職員向けに診療情報活用システムの操作研修会・個別相談会を毎年開催しています。

近年、医療機関を標的としたランサムウェアによるサイバー攻撃が急増し、電子カルテの閲覧・利用ができなくなる等により、地域の医療提供体制に影響が生じる事例が発生しています。診療情報室では、大規模システム障害に備えて、来院患者対応や予約延期等の連絡対応で必要となる情報を確保しておくために、6か月先までの各種予約情報(診療予約、入院予定、手術予定)に患者等連絡先を連結したリストをUSBメモリーに毎日抽出し保管管理しています。これからも診療記録の質向上と診療データの利活用を目指し、診療情報管理に尽力してまいります。



図1 新カルテ庫(教育研修棟1階/令和3年10月竣工)
※約16.3万冊の紙カルテを保管(寄稿時点)



図2 A3対応スキャナー
※スキャンセンター1台保有

独立行政法人
労働者健康安全機構 **大阪ろうさい病院**
日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療連携拠点病院
地域医療支援病院

〒591-8025
大阪府堺市北区長曾根町1179-3
TEL 072-252-3561(代表)
072-255-8076(メディカルサポートセンター)
FAX 072-255-8203(メディカルサポートセンター)
<https://www.osakah.johas.go.jp/>



(病院HP)